連載5 切手の思い出

ロケットの話

特許審査第四部長　櫻井 孝

ドラえもんの道具に「郵便ロケット」というのがあるそうだ。フリー百科事典ウィキペディアによれば、この郵便ロケットは、「ポストのような形をした道具。大きさは高さが10～20センチ程度の物。この道具に送り先の場所を記入し、道具の内部に送る物を入れると、ロケットのように空高く打ちあがり、目的地まで運んでくれる」ものなんだそうだ。いやはや、こんなことできたらいいな♪、というところであるが、まさにこれと同じようなものが1930年代のインドで実験されていたとしたら、どうだろう……。

ステファン・スミス。郵便物をロケットで輸送することを追い求めた男。彼の功績を綴った書には、彼の後ろ楯となったシッキム王のポートレートが載っているが、その王様が手にしているのは、まさに昔の郵便ポストを彷彿とさせるような形（円筒の頭に円錐形を被せた形）のロケットだ。その大きさは、ドラえもんの道具よりは若干長そうで50センチほどだろうか、しかしドラえもんの道具との相似性は十分驚くに値する。

前回このコラムで取り上げたが、遠隔地にできるだけ早く郵便物を届けるために空飛ぶ輸送手段、すなわち飛行機を使うことは既に1930年代にはごく普通に行われていた。しかし、その欠点は、当たり前だが飛行機が発着できる場所がないところには適用できないということだ。今でこそヘリコプターが実用化されているが、1930年代はようやくその実用化が図られつつあるという時期だった。特に、離島とか、険しい山奥とか、そんなところにいち早く簡便に郵便物を届けるにはどうしたらいいか……。スミスはロケットを使うことを考えて、実際に実験を行ったのである。

彼がインド各地で実験を行ったのは、1934年から1941年にかけてのこと。いずれの実験でも数の多少はあれ、郵便物とか小包のような物がロケットに搭載されていた。

最初の一発は1934年9月30日にカルカッタ（現コルカタ）の近くで、船の上からSaugor島に向けて発射された。一連の実験には、英国製ロケットかあるいはインド製ロケットが使われたが、初期の頃は目的地に着く前にロケットが爆発することもしばしばあったようだ。スミス自身が残した実験メモによれば、たとえば1934年12月17日の第23回実験では、ロケット点火直後にロケットが爆発し、スミスが右手を火傷したと書かれている。スミスの残した漫画チックなスケッチには、四散するロケット、逃げまどう人々と「HELP」の文字が書き込まれている。

彼は少なくとも270回ほどロケットを発射したそうだが、彼の実験の中で有名なのは、インドの北、ヒマラヤ山中のネパールとブータンに挟まれたシッキム王国（当時）で行われた一連のものであろう。シッキムは1975年にインドに併合され、現在はインドの1州となっ

ステファン・スミス生誕百周年を記念して1992年12月19日に発行された記念切手(ギボンズ#1522)

生きたニワトリを載せて飛んだロケットNo.65のロケットラベル。「LIVE STOCK」の表示があるのはそのため。

シッキムにて1935年4月9日、実際にロケットNo.50に搭載されてとんだ郵便封筒。左側に貼られているのはジョージV世の肖像切手で、右側のものはロケットラベル。左下コーナーにあるのがスミスの署名。

ているが、1930年代当時は英国の保護下にある王国であった。スミスはこのシッキム王国に入り、シッキム王の公式な許可をもらって、ロケット郵便の実験を数多く行った。シッキムでの最初の一発は、1935年4月7日、彼にとって通算第38回目の実験がそれにあたる。それ以降、彼はロケットに郵便物や小さな品物を搭載して、川を越え、山を越え、ロケットをぶっ放し続けたのである。ときにはシッキム王自身がロケットに点火した。

実験とはいえ、公式に認めてもらった郵便物の移送であるから、それぞれの郵便物には郵便切手も貼られ、公式の消印が押されている。さらにスミスは、おそらく実験のための資金を集める目的だったと思われるが、郵便切手とは別にこの実験用ロケットに搭載する郵便物に貼る特別のラベル(ロケットラベル)を作った。それらのラベルには、搭載した、あるいは搭載する予定のロケットの番号がスタンプされているものがあり、ラベル単独でも販売された。そういったラベルの裏面や余白にはスミス自身が署名をしているから、やはり切手愛好家をターゲットとした資金集めの手段だったように思われる。

なお、スミスは生きたニワトリもロケットに積んで飛ばしている。1935年6月29日のこと。通算65回目のロケット発射のときである。雄鳥と雌鳥各1羽を載せたロケットはDamoodar川を越えて対岸に届いた。この雄鳥と雌鳥は飛行後も無事に生きており、見方によってはロケットで空を飛んだ最初の動物となった。その後2羽はカルカッタの私設動物園に寄贈されて、長く生きたとのことである。めでたし、めでたし。

1992年にはスミスの生誕百年を記念した記念切手がインドで発行された。切手には、スミスの肖像とともに、初期の頃のロケットに搭載された郵便物3通が描かれている。

ロケット郵便の実験はインドでスミスが行ったものだけではなく、世界各地でいろんな人によって同様な試みがなされたようである。しかし、結局ロケット郵便という彼のアイデアをインドで引き継ぐ者はいなかった。ロケット郵便のアイデアは消えてしまったのである。ただ、数十年後になってドラえもんの道具として似たようなものが登場したとスミスが知ったら、満足して大笑いしてくれそうな気がする。しかし、所詮は夢の世界での話でしかなかったのだ。

【参考文献】

□ From the Diary of STEPHEN SMITH compiled by D.N.Jatia, published by The Philatelic Congress of India, New Delhi, 1980

□ The Silver Key to the Golden Treasure of Indian Philately Manik Jain, S.B.Kothari, Calcutta, March 1986